

# 絃上

金剛弥五郎作

前

ワキ

師長従者

ツレ

藤原師長

シテ

海士の翁

ツレ

海士の嫗

後

シテ

村上天皇

ツレ

龍神

季は

地は

秋

摂津

「八重の汐路を行く舟の。く。唐は何くなるらん。

師長詞 「そもそも是は太政大臣師長とは我事なり。

ワキ詞 「さても此君と申すは。天下に隠れなき琵琶の御上手にて御座候ふが。入唐の御望みますにより。

此度思し召し立ち道すがら名所の月をも御覧ぜん為めに。只今津の国須磨の浦に御下向にて候。

師長サシ 「我はさていつの夕べを都の空。まだ夜深きに旅立ちて。未に見えたる山崎も。過ぐれば跡に早なりて。

「波越す袖の湊川。く。まだ知らぬ。方にも我は生田の。漏りくる月は木の間にて。心尽しの旅の道。されども是は唐の。門出と思へば勇みある。高麗の林をよそに見て。須磨の浦にも着きにけり。く。

詞 「御急ぎ候ふ程に。是は早津の国須磨の浦に御着きにて候。暫く此所に御休みあり。事の由をも御尋

シテ、ツレ一聲  
ねあらうするにて候。

シテ、ツレ一聲  
「持ちかぬる。汐汲む桶の苦しきに。又力づく老の  
杖。

ツレ  
「拙なき業を須磨の浦。

二人  
「詠めに憂きや忘るらん。

シテサシ  
「面白や浦に入日は海上に浮び。須磨や明石の浦の  
様。

二人  
「塩焼く海士の心にも。さも面白う候ふなり。

ツレ  
「南を遙かに詠むれば。雲に続ける紀の路の小島。

シテ詞  
「由良の戸渡る早舟も。汐追風の吹上や。

ツレ  
「遠浦ながら住吉の。松こそ見ゆれ海越しに。

シテ  
「富島の磯屋昆陽難波。

ツレ  
「名には絵島と云ひながら。

シテ  
「いかで筆にも及ぶべき。

二人  
「あら面白の浦の氣色や。

下歌地  
「実にや面白き。海士の磯屋とや淡路潟。あは沖舟

の漕ぎくるは。雨ごさめれ今一かへりも。汐汲め  
や人々。

上歌  
「そよや陸奥の。く。千賀の塩竈は。名のみにて  
遠ければ。如何が運ばん伊勢島や。阿漕が浦の汐  
をば。度重ねても汲み難し。田子の浦の汐をば。  
いざおりたゝんわくらはに。問ふ人あらばわぶと  
答へて。此須磨の浦の汐汲まん。く。  
「塩屋に帰り休まうずるにて候。

ワキ詞  
「塩屋の主の帰りて候。御宿を借らばやと存じ候。  
如何に是なるは塩屋の主にてあるか。

シテ  
「さん候塩屋の主にて候。

ワキ  
「是に御座候ふは太政大臣師長公と申して。天下に  
隠れましまさぬ琵琶の御上手にて候ふが。入唐の  
御望みにて此浦に御下向にて候。一夜の御宿を参  
らせ候へ。

シテ  
「いや左様の人にて御座候はゞ。異浦にて御宿をめ

され候へ。

ワキ 「あら何ともなや。難波渡りにてこそ異浦なんだ、

は申すべけれ。是は須磨の浦にてはなきか。たゞ  
御宿を参らせ候へ。

シテ 「見苦しく候へども。さらば御宿を参らせ候ふべし。

ツレ 「されば一年雨の祈の御時。神泉苑にして。琵琶の  
秘曲を遊ばされしかば。

シテ詞 「龍神もめでけるにや。さしもの晴天にはかに曇り。

大雨降る事終日。それよりして此君を。雨の大臣  
とは申すとかや。

ツレ 「か程やごとなき此君に。一夜の御宿を参らせて。

シテ 「秘曲をも聴聞申すならば。

二人 「ためしなき思出。

下歌地

「彼蟬丸は逢坂や。藁屋にて琵琶を弾き給ふ。今此  
君は須磨の塩屋。露も溜らん軒の板間。逢ひ難き  
砌に。逢ふぞ嬉しかりける。

「里離れ。須磨の家居の習ひとて。く。何事を松

の柱や。竹あめる垣は一重にて。風も溜らじ痛は  
しや。海は少し遠けれども。波たゞこゝもとに聞  
えきて。いつの間に。夢をも御覧候ふべき。よし

く。それも御琵琶を。寐られぬまゝに遊ばせや。

我等も聴聞申すべし。我も聴聞申さん。

ワキ詞 師長 「如何に申し上げ候。夜もすがら御琵琶を遊ばされ  
候へ。

「此須磨の巻の春かとよ。源氏此浦に遷され給ひ。  
初めて世の味ひの辛きを知るといへども。まだ汐  
じまぬ旅衣。泣くばかりなる涙の露の。玉の小琴  
を弾き鳴らし。恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は。  
思ふ方より風や吹くらん。

地 「それは浦波の。音通ふらし琴の音の。く。是は  
弾く琵琶の。折からなれや村雨の。古屋の軒の板  
庇。日ざます程の夜雨や。管絃の障りなるらん。

シテ詞

「や。何とて御琵琶をば遊ばし止められて候ふぞ。

ワキ詞

「さん候村雨の降り候ふ程に。さて遊ばし止められ

て候。

シテ「實に村雨の降り候ふぞや。如何に姥。苦取り出だ  
し候へ。

ツレ「それは何の為めにて候ふやらん。

シテ「苦にて板屋を葺き渡し。靜かに聴聞申さんと。

二人「祖父と姥は諸共に。

ツレ「苦取出だし。

シテ「さつと葺き。

地「塩竈の名の。近々と寄り居つゝ。耳を峙て聞き居  
たり。

ワキ詞

「如何に主。かほど漏らざる板屋の上を。何しに苦  
にて葺きて有るぞ。

シテ

「さん候唯今遊ばされ候ふ琵琶の御調子は黄鐘。板  
屋を敲く雨の音は盤渉にて候ふ程に。苦にて板屋

を葺き隠し。今こそ一調子になりて候へ。

「さればこそ始めより。唯人ならず思ひしに。心に

くしや琵琶琴を。いかでか弾かで有るべき。

二人「所から江の辺り。岩越す波の弾きやせん。琵琶琴の。思ひもよらぬ御詫なり。

地「思ひよらずも琴の音の。押して御琵琶を給はりて。

シテ「祖父は琵琶を調ぶれば。

ツレ「姥は琴柱を立て並べて。

地「撥音爪音。ばらりからりからりばらりと。感涙  
もこぼれ。嬰児も躍るばかりなりや。弾いたり  
く面白や。

師長「師長思ふやう。

地「師長思ふやう。我日の本にて。琵琶の奥儀を極め  
つゝ。大国を窺はんと。思ひし事のあさましさよ  
や。まのあたり。かゝる堪能有りける事よ。所詮  
渡唐を止まらんと。忍びて塩屋を出で給へば。そ

れをも知らず琵琶琴の。心一つの嗜みにて。越天  
樂の唱歌の声。梅が枝にこそ鶯は巣をくへ。風吹  
かば如何にせん。花に宿る鶯。宿人の帰るをも。

知らず弾いたり琵琶琴。

ツレ詞  
「なふ旅人の御立ち候。」

シテ詞  
「何旅人の御立ち候ふとや。何とて留め申さぬぞと。」

二人「祖父と姥は走りより。」

地「琵琶琴よりも御袖を。唯引けやく横雲の。夜は

まだ深し浦の名の。明かして御立ち候へ。」

師長「何しに留め給ふらん。先づ此度は帰洛して。重ね  
て尋ね申すべし。御名を名乗り給へや。」

二人「今は何をか包むべき。我絃上の主たりし。村上の  
天皇。梨壺の女御夫婦なり。」

地「御身の入唐とゞめん為め。夢中にまみえ須磨の浦。  
故院の昔の夢の告。思ひ出でよ人々とて。かき消  
すやうに失せ給ふ。」

く。

(中入)

「そもそも是は。延喜聖代の御譲り。村上の天皇とは我事なり。其聖代の御宇かとよ。唐より三面の琵琶を渡さるゝ。絃上青山獅子丸これなり。さる程に獅子は龍宮へ取られしを。いで召し出だし弾かせんと。漫々たる海上に向ひ。如何に下界の龍神たしかに聞け。獅子丸持参つかまつれ。

地「獅子丸浮ぶと見えしかば。く。八大龍馬を引き連れ引き連れ。彼御琵琶を授け給へば。師長給はり弾きならし。八大龍王も絃管の役々。或は波の鼓を打てば。或は琵琶の名にしあふ。獅子団乱旋に村上の天皇も。奏で給ふ。面白かりける秘曲かな。」  
（早舞）

シテ

「獅子には文珠や召さるらん。

地

「獅子には文珠や召さるらん。帝は飛行の車に乗じ。

八大龍馬に引かれ給へば。師長も飛馬に鞭を打ち。

馬上に琵琶を携へて。く。須磨の帰洛ぞ有難き。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評釈 第六輯』 大和田建樹 著